

稱讃 二二五号

二〇二〇年十二月二日発行

一、他流には、名号よりは絵像、絵像よりは木像といふなり。
当流には、木像よりは絵像、絵像よりは名号といふなり。

運如上人御一代聞書』

十数年前の東組の連続研修会（組連研）でのことでありますが、ある受講者のお一人から何故、南無阿弥陀仏の仏さま“と言うのですか？阿弥陀仏”で、良いのではないですか”と尋ねられたことがあります。
そう言われると、私も普段から阿弥陀さま”とか阿弥陀仏”阿弥陀如来”と申しております。

お木仏やご絵像を視て、そのお名前を言うことは、単なる対象でしか捉えていないことであ

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com



りましょう。

み名をとなえる」と言った場合、浄土真宗

では、称える”であり、唱える”ではありません。唱える”は単に発声することでありますが、称える”は讃える”の意味があります。

また、親鸞聖人は『唯信鈔文意』の中で、

尊号」と申すは南無阿弥陀仏なり。

尊”はたふとくすぐれたりとなり、号”は仏に成りたまうてのちの御なを申す、名はいまだ仏に成りたまはぬときの御なを申すなり。

と仰っており、名”だけでは、私のためにこれから仏さまに成ろうと誓われる（因）段階であり、号”は私のために、仏さまとして、はたらいておられる（果）ことを意味しております。

南無”は 帰命”、 帰依する”という、称える私の側の言行であり、思いであります。が、みなを単なる名前の敬語ではなく、号”の意味からすれば、仏さまと成られた阿弥陀さまからのお呼び声（はたらき）と味わえることではないでしょうか。

お仏像・ご絵像の方が、作成するには困難であり、モノ”として視る場合には価値があると考えてしまいますが、南無阿弥陀仏”のお名号は今、この私に、南無阿弥陀仏”と呼び、はたらいておられると味わう方途（方便）と思っただけだと思えます。

浄土真宗においては、報恩講”は、親鸞聖人（親鸞さま）のご遺徳を偲ぶところに、南無阿弥陀仏”と成られた親鸞さまへの仏徳讃嘆と心得たいと思えます。

報恩について

白川 晴頭氏

中央仏教学院前院長

宗祖親鸞聖人のご遺徳を偲ぶ報恩講が、各地でつとめられる季節となりました。今年はコロナ禍のため、例年通りにおつとめすることができないという声も多く聞かれます。そこで今回は、紙上法話「報恩」についてをお届けします。筆者は、中央仏教学院前院長の白川晴頭さんです。

『平願寺新報』2020年10月20日号

苦悩から抜け出す手立てが何一つない私を、阿弥陀如来は救わずにはおられなかった

私の気付かない心の奥底に
如来のはたらき忘れない心

報恩講の季節を迎えましたが、いまだ新型コロナウイルス感染の収束に見通しが建ちませんので、お寺の報恩講法座も中止せざるを得ないところもあるのではないのでしょうか。そうした中、改めて「報恩」について考えてみましょう。

「報恩」とは「恩に報いる」と読みます

が、その「恩」は阿弥陀如来のご恩を意味することは言うまでもありません。「恩」という漢字は「因」と「心」で出来上がっています。すなわち、「恩」には原因を考える心が同居しているといってもよいでしょう。

親鸞聖人の「三帖和讃」の最初に置かれている冠頭讃に、

弥陀の名号となへつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもひあり

（『註釈版聖典』五五五頁）

と讃えられた一首があります。信心の眼が開かれた人は「憶念の心」、すなわち憶えていて忘れない心がいつまでも続き、それが報恩感謝の念おもいになると示されています。人は歳を重ねるごとに記憶力が低下していくにもかかわらず、なぜこのような表現がされているのでしょうか。

私が勤務していた中央仏教学院は、京都市右京区にある本願寺派の僧侶を養成する教育施設ですが、親元を離れて単身生活を始める学院生が多くを占めていました。入学当初は、その寂しさ・孤独感から故郷を思い、親を慕う気持ちが人一倍強くあったと想像できますが、しばらくして環境にも慣れ、友人もできてきますと、当然のこと

ながら親のことを考える時間は減少してきます。しかし、そうかといって親のことを忘れたわけではありません。平素はいつも親のことを意識し思い続けていなくても、親が故郷に元気でいてくれるという、いわば無意識の安堵感が京都での生活をしっかりと支え、充実させていることは確かです。

それと同じように、信心の眼が開かれた人には、いつもいつも阿弥陀如来のことを意識し念っていないくても、ちょうど親を慕う子どものように、気付かない心の奥底で阿弥陀如来のはたらきを忘れない心がそなわり、それが人生を送る上での安堵感と如来への報恩感謝につながっているのです。

ありのままの相に気付き
慚愧する心で報恩講迎える

今夏、テレビで「半沢直樹」という視聴率30%を超える番組が放映されました。その中で「倍返し」とか「恩返し」という言葉が使われていましたが、報恩の「恩」は返すものではありません。親への恩を示した言葉として、「孝行したいときに親はなし」ということわざがあります。また、「親孝行したと思う心に孝行なし」という言葉を聞いたこともあります。本当の孝行は、自分で意識的にしようと思つてできるものではありません。

今年6月に母親が往生しました。九十九歳でしたが、母親に叱られたという記憶がないほど、人一倍優しい母親でしたので、その温顔が今でも頭に浮かんできます。母親は嫁いだ後、病気のため足が不自由な身になりましたが、門信徒への法要の案内を一軒ずつ歩いて配るなど、辛抱強い性格と誰とでも気軽にお付き合いする人柄で、長年にわたり、お寺を盛り立ててくれました。また六十歳半ばで長女（私の姉）に先立たれるなど、その苦悩は計り知れないものがありました。大が憂うて優しさができあがる」という言葉が語るように、苦悩がそのまま母親の優しさに繋がっていったように思われます。

学院を退任するまでの最後の約10年は、新幹線で京都と自坊のある三原（広島県）との往復を毎週続けていましたが、タクシーで最寄りの駅へ向かうときには、タクシーが家を出る最後までいつも手を振って見送ってくれました。まさに子を思う母親の気持ちを思い知らされました。今となっては 母の生存中に、あれもしてあげればよかった。これもしてあげればよかった。もう少し親の気持ちを考えてあげればよかった」という慚愧の心が蘇ります。阿弥陀如来へのご恩も同じことです。有名な「恩徳讃」には阿弥陀如来への報恩謝徳の念いが、

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

（同六一〇頁）

と讃嘆されています。身を粉にしても「ほねをくだきても」の言葉は、苦悩のただ中であって、そこから抜け出す手立てを何一つ持ち合わせていない煩惱だらけの自分であったために「原因」、阿弥陀如来は救わずにはおられなかったと知らされた「心」を、報じても謝してもなお尽くしきれぬものではない報恩謝徳の念いとして表現されたものです。自分ほど賢い者はないと思う傲慢な心に、どうして他者への報謝の心が湧いてくるでしょうか。自分のありのままの相に気付き、それを慚愧する心で報恩講を迎えたものです。



稱讃寺

宗祖親鸞聖人

報恩講 ご案内

今年の「報恩講」さんは、左記の通り、法要（おつとめ）を二回に分けて厳修いたします。ご都合のつく時間帯にご参拝賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

記

期 日 十二月十三日（日）

時 程

一 〇〇 おつとめ

宗祖讃仰作法 音楽法要

一 四〇 法話（住職）

二 〇〇 恩徳讃

二 三〇 おつとめ

正信偈 行譜・六首引

三 一〇 法話（住職）

三 三〇 恩徳讃

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

顕浄土真実教行証文類』六巻 ㊟

梯 実圓氏

こうして如来行である大行に喚び覚まされて人びとに本願を疑いなく聞き受ける信心が与えられるから、「ぎに 信文類 信巻」を顕わして、真実の信心の構造をあきらかにしていくのである。第十八願には往生の因として 至

心、信樂、欲生 至心に信樂してわが国に生まれんと欲へと三心が誓われている。親鸞によれば、その至心とは、本願が如来の智慧の顕現であって嘘も詐りもない真実であることを表わしており、欲生とはかならず往生できると思えと、大悲をもって人びとを招喚する如来の勅命を表わしている。そして信樂とは、その真実なる如来招喚の勅命を疑いをまじえずに聞き受けているところのことであるから、三心といっ

ても、わたしのしにあるのは、疑いなく勅命を聞き受けている信樂の一心だけで、至心と欲生はその一心に摂まっている徳義であるという在り方をしている。それを 三心即一の信心という。

ところで至心は如来の智慧の現れである真実心であり、欲生は如来の大悲回向の現れであるから、それをはからいなく聞き容れている信樂

信心の本体は、大智大悲の仏心であるといわねばならない。信心は、確かにわたしのしにひらけているところにはちがいないが、その本体は凡夫のところではなくて、如来回向の仏心であり、自利と利他とを完成する大菩提心としての徳をもっているから、往生成仏の因 種

となると断定し、これを 信心正因と呼んでいる。こうして本願を信じる者は、「即座に阿弥陀仏の光明のなかに摂め取られ、護りつづけられるから、凡夫の身でありながらかならず仏になることが決定している 正定聚」の位に入れしめられるといわれたのであった。

すでに真実の信心を獲、正定聚の位に入れしめられているひとは、この世を終わると同時に阿弥陀仏のさとり領域である真実の浄土（報土）に往生してさとりを極めていく。それを証文類（証巻）には、利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり」（註釈版聖典）三〇七頁）といい、弥陀同体のさとり」といいならわしている。

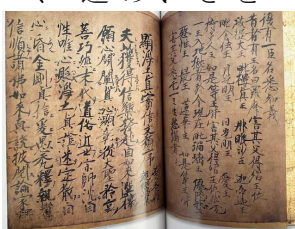
ところで自利と利他を円満して大乘のさとりを完成したということでは、苦しみ悩むものを救うことのできる能力が完成したことを意味していた。それゆえさとりを完成したものは、ただちに大事悲心を起こして、迷える人びとを救うために煩惱の渦巻く

穢土に還ってきて利他の活動をおこなっていく。その還相回向の模様を詳しく説いているのが 証文類の後半である。

ついで 真仏土文類 真仏土巻」が顕わされる。限らない智慧の光と、限らない慈悲の「のち」を完成して阿弥陀仏となり、浄らかな涅槃の浄土を莊嚴して、いっさいの衆生を救っていかれる真実の仏と浄土の徳をあきらかにするためである。その真仏土こそ、往相の行者が帰入して証果を開く場所であると同時に、往還二種の回向がそこから展開していく真実の教法の根源でもあったのである。

最後に顕わされた 方便化身土文類 化身土巻」は、真実の教法に対して、真実でない教えについて明かされる。真実でない教えのなかに、邪偽の宗教と方便の教法がある。邪偽とは、真実に背いて煩惱を助長していくような宗教をいい、方便とは邪偽の教えから真実の教えへと人びとを導き育てるために階層性をもって説かれた仏の教えのことである。そのなかに聖道門と、浄土門内の要門と真門があるが、そのありさまと役割が広く説き示されている。

こうして 教行証文類は、教、行、信、証、真仏土、方便化身土の六巻に分けて、浄土真宗という真実の宗教と、真実に背く邪偽の宗教と、邪偽から真実へと人びとを導いていく方便の宗教とを体系的にあきらかにするという壮大な構想のもとに顕わされた聖典である。



板東本 国玉

三帖和讃

和讃とは、和語 やまとことばをもつて仏徳を讃嘆する詩ということであるが、とくに平安時代の中期から鎌倉時代にかけて流行した七五調の、四句で一首になる 今様^{いまよう}と呼ばれる詩形で、仏徳を讃嘆するものを 和讃^{わさん}と呼んでいる。もっとも親鸞は和讃のことを やわらげほめ^{やわらげほめ}といわれたように、漢文で書かれていた經典や祖師の釈文を やわらげ^{やわらげ}て、だれにでもわかるように易しく表わしたものであるというわれている。事実、親鸞の和讃には、拠りどころになった経^{きょう}釈^{しやく}の文があるということが特徴のひとつとなっている。

親鸞の和讃は、五百五十首ほどにも達するが、そのなかで 『浄土和讃』 『高僧和讃』 『正像末和讃』をとくに 『三帖和讃』と呼びな

らわしている。その制作年代は、『浄土和讃』と『高僧和讃』は、七十六歳のときに初稿本がまとめられ、八十三歳のときに改定本が出されたようである。『正像末和讃』は八十五歳以後に順次成立していったようである。

浄土真宗の門徒は、この 『三帖和讃』を僧俗のへだてなく日常の勤行^{ごんぎよう}に用いて親しんでいた。とくに高田門徒では早い時期から和讃を風誦^{ふうじゆ}（音読）する習慣があったようであるが、本願寺では第八代宗主・蓮如^{れんによ}以前は特別な勤行以外に和讃を用いることはなかったようである。

それを日常のお勤めに採り入れたのは、蓮如であった。蓮如は、そのために文明五（一四七三）年に 『正信偈』と 『三帖和讃』を一組にして木版刷りにし一般に頒布^{はんぷ}した。それを 文明版^{ぶんめいばん}の 『三帖和讃』と呼んでいる。

しかし和讃の原本にはさまざまなものがある。高田本山専修寺^{せんじゆじ}に伝わる、いわゆる国宝本『三帖和讃』は、『浄土和讃』にあたるのが百十六首、『高僧和讃』が百十七首、『正像末和讃』が三十四首、それに夢告讃一首、別和讃五首の総計二百七十三首が収録されている。それにひきかえて文明版の『浄土和讃』は百十八首、『高僧和讃』は百十九首、『正像末和讃』は百十六首で、合計三百五十三首が収録されている。また文明版の終わりに は 自然法爾御書^{しよ} が付録されている。

さらに 『三帖和讃』のほか、八十三歳のときまとめられた 皇太子正徳奉讃^{こうたいししょうとくほうさん} 七十五首と、八十五歳の作と考えられる 大日本国栗散王聖徳太子奉讃^{おう} 百十四首があり、またどこにも所属していない和讃や、文言が少し変わっているものが別和讃として顕智^{けんち}などによって伝えられているから、すべてを総計すると五百五十首ほどになる。これほど多くの和讃を作った人はほかにいないだろう。高い格調をもち、雄渾^{ゆうこん}な声調^{せいちよう}で詠いあげられる親鸞の和讃は、質量ともに日本の和讃史上最高の地位を占めつけ

るにちがいない。

『浄土和讃』は、国宝本では『弥陀和讃』と呼ばれているようであるが、その最初は曇鸞大師の『讃阿弥陀仏偈』をやわらげて和讃された讃阿弥陀仏偈和讃^{さんあみだぶつげ} 四十八首ではじまっている。まず阿弥陀仏の功德を十二の光明の徳をもって讃え、十方の衆生を救う還相の菩薩の功德と、さらに浄土三部経を和讃した 大経和讃^{だいきやう} 『観経和讃』 『弥陀経和讃』が説かれ、さらに 称讃浄土経^{しょうさんじようどきやう} 『法華経』 『涅槃経』

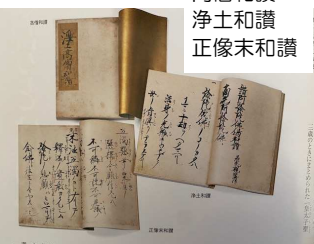
『華嚴経』などの諸経によって阿弥陀仏を讃嘆する 諸経和讃^{しよきやう}、また 金光明経^{こんこうみやうきやう} や 『十往生経』などによって 現世利益和讃^{げんぜりやく}

が作られ、最後に 首楞嚴経^{しゆりやうごんきやう} 首楞嚴三昧^{さんまい} 経^{きやう} によって大勢至菩薩、すなわち法然聖人を賛仰する 勢至和讃^{せいしほさん} がおかれている。

『高僧和讃』は、浄土真宗の法義をインド・中国・日本の三国にわたって伝えられた、龍樹菩薩、天親菩薩、曇鸞大師、道綽禪師、

善導大師^{ぜんどうだいし}・源信和尚^{げんしんかしやう}、源空聖人^{げんくうしやうにん} 法然^{はつぜん} という七人の高僧の徳を讃えられたもので、正信念仏偈^{せいしんねんぶつげ}（正信偈）の後半の部分を和讃として広く讃詠されたものといえよう。

和讃
浄土和讃
正像末和讃



『正像末和讃』は、釈尊を遠く離れるにつ

れ、仏法は正法・像法・末法としだいに衰退し、今日ではもはや自力の修行によってさとりをひらくことができない末法濁乱の時代になっている。

そんな時代に生きるわたしども凡夫が救われる道は、阿弥陀仏の本願のほかにはない。その本願の救いに遇うことができたのはひとえに如来大悲の恩徳であり、浄土の祖師のお陰であると賛仰された和讃である。それゆえ最後は、

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

という、いわゆる恩徳讃で結ばれている。

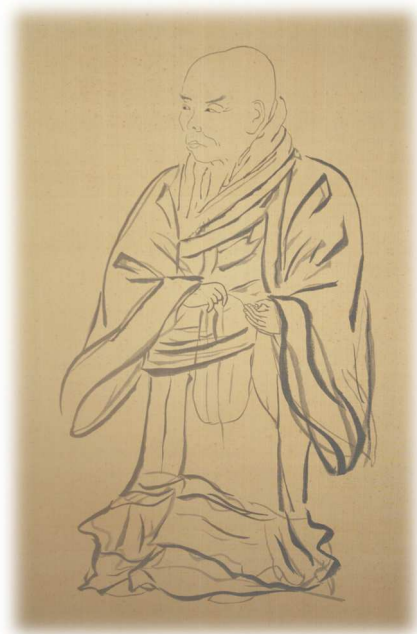
さらに本願を疑うことをいしめた「誠疑

讃」と、観世音菩薩の化身である聖徳太子を讃仰する十一首の「皇太子正徳讃」、自身の愚か

さと、頽廢した仏教界の現実を悲嘆する「愚禿

悲嘆述懐」、それに聖徳太子和讃の残片と見られる「善光寺和讃」を加えて、全体を『正像末和讃』と呼んでいる

我が親鸞像 養老 孟司氏



時代と親鸞

親鸞聖人のお人柄について、考えたことはほとんどない。というより、そう述べるしかない。

なにしろ米国の図書館で、日本の仏教関係の書籍を集めると、書棚の大半は真宗関係の本になると聞いた。汗牛充棟、いまさら素人が付

け加えることはなにもない。『歎異抄』くらいは若い頃に読んだが、だからどうというわけでもない。

ひとつには、私のものの見方が、本来は理系だからかもしれない。理系の人は人間自体にはあまり関心を持たない傾向がある。とくに昔の人の場合には、知られているのは主にそのひとの発言、あるいはその人物を知る人の叙述である。いずれにせよそれは言葉、つまり情報である。理系でも情報はむしろ大切だが、同時に決

して鵜呑みにしてはいけないものである。その態度を極端まで進めると、自分の感覚でとらえたモノの世界しか、根本的には信用しないという態度になる。そこに宗教思想の入り込む余地は乏しい。

同じ態度が、人と社会の関係についても現われる。伝記は個人の生涯を描く。でも理科的には、その人が置かれた社会状況に、より注目してしまう。故人が置かれた社会とは、つまり実験室の中での実験条件だからである。どういう条件下でその結果が得られたか、それは化学実験の首根っこである。

我が親鸞像についても、それは同じというしかない。親鸞が生きた時代に、この世はどういう世界であったのか。つまりそれは親鸞という人物を生み出すような時代だったはずである。そのことについてなら、私には強い関心がある。平安末期から鎌倉時代とは、いかなる時代だったか。文献も乏しいわけではない。『万丈記』『平家物語』はいうまでもない。

現在私は鎌倉に住んでいるが、当寺の鎌倉がどのような街であり、人びとが実際にどのような暮らしをしていたのか、具体的に想像するのは容易ではない。頼朝の墓ならいまでも見ることができるが、いったいあそこにはなにが入っているのだろうか。火葬したとするなら、どのようにしたのだろうか。仮屋を建て、それごと燃やしたと聞いたこともあるが、もっと具体的にはどうしたのだろうか。些事を知りたいのではない。当時のことをできれば「感覚」を通して感じてみたい」のである。

そうした私に、大きな衝撃を与えてくれたのは『兎相詩絵巻』である。若い女性が死んで、

その死体がしだいに変化していく。鴉からすにつつかれ、犬にかじられ、ついには散乱する白骨となる。これが想像図でないことは、似たような状況を写した、藤原新也氏のインドのベナレスでの写真集を見ればわかる。これを見たときに、はじめて鎌倉時代というものが私の中で感じられた」ように思った。つまり愚禿親鸞ぐとくしんらんと自称した人物の背景が、やっと少し 目に見えた」と感じたのである。

それは親鸞に限らない。道元どうげん禪師、日蓮にちれん聖人もまた同じであろう。宇治平等院に鳳凰堂が造られた時代とは、ずいぶん違っていたのである。

平安時代の中期は現代と同じ都市文明だが、鎌倉時代は身体の時代、田舎の時代だ。その後私はそう書くようになった。それは生老病死が眼前する世界である。そう思えば、『平家物語』の書き出しもよく理解できる。『方丈記』の書き出しも、ほぼ同じ内容といってよいのではなからうか。

つまりは諸行無常である。いわばそれは、この国において、あそこで本当の意味で 発見された」のである。だからこそ、冒頭に書かれる。ということは、それ以前の時代の人は、そうはおもっていないかったということである。藤原道真は、藤原氏の栄華が永遠に続くと思っていたかもしれない。それを情報化社会という。平安時代を情報化社会などといえ、な

んのことかと思われるであろう。でも情報とは永遠に続くもの、いつまでも同じでしかないものを指す。いまの自分の写真を撮れば、いつまでもたっても 同じ」私の像が描かれてしまうではないか。諸行無常を説く「平家物語」の文章も、七百年以上前から変わっていない。そのどこが諸行無常か。

自分たちの栄華がいつまでも続くと思うのもまた、自分を情報と見なしているということである。現代人の 私は私、同じ私」もまた、同じ陥穽かんせいに陥ってしまったている。そう思えば、親鸞の現代的意義もまた明らかであろう。永遠を希求するとはいかなることか、あの時代にその本質を説いた真宗の奥義を、現代にはまり込んでいるわれわれは、本当に理解できるのであるうか。

● 汗牛充棟 かんぎゅうじゅうかん

蔵書がきわめて多いことの形容。本が非常に多くて、牛車に積んで運ぶと牛も汗をかき、家の中に積み上げれば棟木にまで届いてしまうから。

● 陥穽 かんせい

人をおとしいれる策略。わな。動物などを落ち込ませる落とし穴。

コロナ問題で変わっていく

価値観とは何か

養老孟司が考えるコロナ論

■ コロナとどう暮らす

夜には死ぬという前提で毎日始める

自分が日常を生きて行くときに排すべきなのは。本日のコロナによる志望者何名という神さま目線であろう。神様目線が生存に有効になるような社会を構築すべきではない。神様目線の対極は文学の目線であろう。我が国の文学は伝統的に花鳥風月を主題としてきた。当たり前だが、花鳥風月は人ではない。コロナが終わった後に国民の中心に对人的仕事をより対物の仕事をする傾向が育てばと願う。具体的には職人や一次産業従事者、あるいはいわゆる田舎暮らしである。そういうことが十分に可能であれば国々社会の将来は明るいと思う。对人的のグローバルズムに問題は多いが、対物のグローバルズムに問題は少ない。自然科学は対物グローバルズムといってもいいであろう。物理法則は言語や文化の違いで変化しない。対人より対物で生きる方が幸せだと感じる人は多いと思う。

アップルの創始者スティーブ・ジョブスはStay homeではなく、Stay hungry, Stay foolish,とスタンフォード大学の卒業式の式辞で述べた。その真意は捉えにくい。ただし式辞全体をネットで聞くことができる。素晴らしいスピーチというべきであろう。その中で彼は言う。夜には死ぬという前提で毎日始める」。コロナは死という生の前提を各人が目前にもたらしただ。これで人と人が構成する社会が成熟しないはずがない。それを期待して、本稿を終える。

(Book Bang より抜粋)

※ 対仏」と言うのはどうだろうか？

稱讃寺 行事予定

二〇二〇年 十一月の行事予定

一日 日	日曜礼拝 午前七時 門信徒の集い 午後二時
六日 金	のんのん法話会 午後二時
八日 日	日曜礼拝 午前七時
五日 日	日曜礼拝 午前七時
六日 月	のんのん法話会 午後二時
二二日 日	日曜礼拝 午前七時
二六日 木	のんのん法話会 午後二時
二九日 日	日曜礼拝 午前七時 親鸞聖人を知ろう 午後二時

※日曜礼拝の時間を午前七時に繰り上げたい
と思いますので、お時間がございましたら
是非、ご参拝ください。

いま
今しかできないことを
たいせつ

大切に

二〇二〇年 心のともしび「十一月カレンダーより

二〇二〇年 十二月の行事予定

六日 日	日曜礼拝 午前七時 門信徒の集い 午後二時
三日 日	日曜礼拝 午前七時 親鸞聖人報恩講 午前十時
六日 水	のんのん法話会 午後二時
二〇日 日	日曜礼拝 午前七時
二六日 土	親鸞聖人を知ろう 午後二時
二七日 日	日曜礼拝 午前七時

二〇二一年 一月の行事予定

一日 金	元旦会 午前七時
六日 水	のんのん法話会 午後二時
一〇日 日	門信徒の集い 午後二時
六日 土	のんのん法話会 午後二時 御正忌報恩講
七日 日	日曜礼拝 午前七時
二四日 日	日曜礼拝 午前七時
二六日 火	のんのん法話会 午後二時
三二日 日	日曜礼拝 午前七時 親鸞聖人を知ろう 午後一時

編集後記

対人」対物」をインターネットで検索すると殆ど「自動車保険」の説明でした。養老孟司さんが仰る「対人」より「対物」で生きる」という考えは、火間中心の生活、自己中心の生き方をしてきたことを顧みて、自然の中での一人として生きよ」と言うことなのかと思いました。

新型コロナウイルス禍中、直接、人が互いに合うことを避けて、LINEやメール、テレワークが利用されることは、手段が変わっただけで、これも対人」であると言われております。でも、同じ対人」であれば、アナログ的な私にとっては、直接、人と会う方が安心します。お寺に気軽に集まって欲しいと思いますし、私が所属する「東京ビハール」では、現在、築地本願寺で集まって語り合うことが出来ず、専らWeb会議スタイルを採っていますが、この会も、もとのように「早くお顔をつきあわせて、お話を聴かせていただきたいな」と思うばかりです。しかし、もとのように「と思うのは、それが「当たり前」常識」との思い込みがあるからなのでしょう。東日本大震災で、多くの人が、当たり前が、当たり前でなかった」と気付いたはずなのですが、中には普通の生活に戻りたいの思いも捨てきれないで今日まできました。

対人」に対する「対物」という生き方の他に、「対仏」という営みを親鸞聖人たちはされてきたのではないだろうか。仏さまと相対的な関係ではなく、お念仏に包まれている生活感（味わい）という意味で。

二〇二〇年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051